つなぐ、つながる、支え合う

あーすちゃれんじゃーの挑戦

長引く物価高騰が暮らしに影響を及ぼす中、経済的に困難な状況にある子育て世帯はより深刻な状況に陥っています。子ども支援に取り組む国際NGO・公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンの調査では、同団体から支援を受ける家庭の８割以上が、１年前と比べて食事の量が減るなどの影響を受けていると回答しました。

このような厳しい状況を支える取り組みとして注目されているのが、民間団体による食料支援です。市内で活動する団体を取材しました。

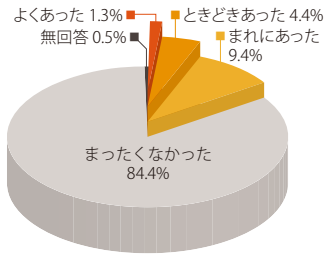
問こども家庭支援課こども家庭係　☎73-9147

新たな支援の形「フードパントリー」

11月のある日、あすてらすに米や野菜、加工食品が次々と運びこまれていました。これらの食料品は、その多くが市民や事業者などから無償で提供されたもの。月1回開かれている「フードパントリー」で配られます。

フードパントリーは英語で「食品貯蔵庫」の意味で、生活が苦しい家庭などに食料品を無償配布するアメリカ発祥の活動です。日本では特に子どもたちへの食の支援として、子ども食堂の取り組みが平成24年ごろから広がりましたが、新型コロナウイルス拡大の影響で食事の提供を休止せざるを得ない中で、新たな支援の形としてフードパントリーが注目されるようになりました。

過去１年の間に、お金が足りなくて家族が必要とする食料（嗜好品を除く）が買えないことがありましたか。

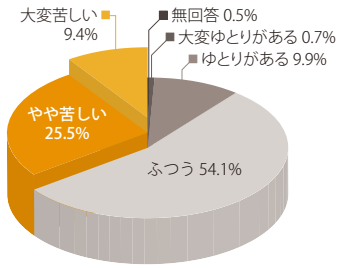


市が令和7年3月に実施した「こどもの生活実態に関する調査」では、小学5年生・中学2年生の保護者597人のうち15・1％にあたる90人が「過去1年の間にお金が足りなくて必要な食料が買えないことがあった」と回答しています。また、3割を超える人が、現在の暮らしの経済的な状況を「苦しい」と回答しました。

令和4年に厚生労働省が実施した「国民生活基礎調査」でも、日本の子どもの11・5％、ひとり親世帯の子どもの44・5％が貧困に直面しているとされています。

一方で国内で1年間に廃棄される食料品は約570万トンにのぼります。フードパントリーは家庭や企業で消費しきれない食料品を活用することで、環境にもやさしい取り組みでもあると言えます。

現在の暮らしの経済的な状況をどのように感じていますか



配布しているたくさんの食料品。セットにせず会場内を回って順番に取っていく形式も子どもたちの楽しみのひとつになっている。

新型コロナで目の当たりにした子育て世帯の困窮

特定非営利活動法人あーすちゃれんじゃーは令和2年からフードパントリーを始めました。対象はひとり親世帯を中心に経済的に困窮する子育て世帯で、現在は100世帯が登録しています。市のフードドライブ(家庭で余っている食品を集める事業)や企業からの寄付で集まった食料品を、毎月1回、事前予約制で配布しています。

「先代の代表が団体を設立した平成30年ごろは、地域の多世代交流の場づくりが主な活動でした。ただ、当時から子育て世帯への食の支援は大きな目的で、将来的にはフードパントリーのような事業に取り組みたかったと聞いています。交流のための食事会が新型コロナで開催できなくなると同時に、子育て世帯の困窮がますます切実になるのを目の当たりにして、予定を前倒してフードパントリー事業を始めました」

こう語るのは、現在代表を務める川畑恵子さん。10人ほどの社員や、ボランティア登録者・協力団体などと一緒に団体を運営しています。

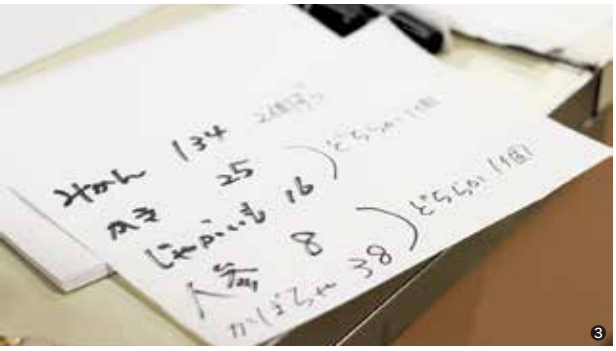
川畑「それぞれ家庭や仕事がある中で、合間を縫って活動しています。環境は違っても、子育てを経験してきた私たちが今の子育て世帯を少しでも支援したいという思いは共通しています。親を支えることで、未来を担う子どもたちを支えられたらと考えています」

支援が必要な世帯とつながるためのきっかけづくり

あーすちゃれんじゃーでは、フードパントリーで食料品を受け取るための利用者登録にあたって、まずは面談を必ず行います。ひとり親家庭、病気や障がいで保護者が働けない家庭、非正規雇用で収入が安定しない家庭……それぞれの事情や状況を聞き取ってから支援に進みます。

「フードパントリーはきっかけづくりの事業。あーすちゃれんじゃーの使命は、困っている子育て世帯と支援機関をつなぐハブになることです」と川畑さんは話します。「特にひとり親家庭の保護者は、悩みや困りごとを一人で抱えていることが多いです。家庭のことや経済的なことは誰にでも気軽に話せるものではないし、行政の窓口は平日の昼間しか開いていない。困った、つらい、どうしたらいいんだろうと思ったときに思い出してもらえる、頼ってもらえる存在になることをめざしています」

あーすちゃれんじゃー代表の川畑さん。
「小郡市のふるさと納税を通じて支援してくださる人もいます。返礼品はありませんが、子どもたちが書いたお礼のメッセージを送っています」動物などのイラストと共に「ありがとう」と書かれた手紙は全て1点ものだ(表紙)



①赤ちゃん向けの食料品も配布
②③全員に行き渡るよう、全て数えて仕分けする

覚えているよ、気にかけているよと伝える場

あるひとり親家庭のお母さんは、第一子が生まれて少したった頃からフードパントリーを利用し始めました。初めての子育てでわからないことだらけで、近くに親族や友人もいない状況だったと言います。

川畑「一時期は、子どもが泣き止まないと夜中にメッセージが続くことがありました。お腹が空いているんじゃない？おむつは汚れていない？と順番に聞いて『ミルクを飲んだら寝てくれました』と返事が来たら、じゃあお母さんもゆっくり休んで、と返事をして。特別なアドバイスはしていないけれど、助けてほしいと思ったときに寄り添える関係性でありたいと思っています」

乳児期を過ぎて当時に比べると落ち着いたそのお母さんは、今でもフードパントリーに来ています。定期的に顔を合わせ、状況の変化や新たな悩みがないかを聞き、継続的に支援しています。

この日のフードパントリーで受け取りに来る世帯の一覧を名前などを隠した状態で見せてもらうと、家庭の状況や困っていることなどが細かく書き込まれていました。

川畑「その後の状況が気になっていること、以前話していた悩みなどを書いています。赤字は、今日絶対に話をしないと！という人。フードパントリーは、覚えているよ、気にかけているよと伝える場でもあります」

それでも最終的には、支援が必要なくなることをめざしています。

川畑「利用者登録のときに必ず、いつかここを卒業してくださいね、と伝えています。実際に何人か『生活が安定してきたので卒業します』と言ってくださった方もいるんですよ」

世代を超えて広がる子育て支援の輪

保護者が食料品を受け取ったり情報交換したりしている間、サンタクロースの格好で子どもたちと遊んでいたのは、市内の高校2年生、池田康太郎さんと友人の塚本雄太さん（高校2年）、柴戸慶太朗さん（高校1年）。ボランティア活動を通してさまざまな関わりを広げたいと考えた池田さんが市ボランティア情報センターに問い合わせ、あーすちゃれんじゃーの活動に参加することになりました。年齢の近いお兄さんたちに遊んでもらえて子どもたちは大喜び。クリスマスのお菓子ももらって、特別な1日になりました。

池田さんに誘われてきた塚本さんと柴戸さんは「一緒に遊んだり食料品を手渡したりしたときに、子どもたちがニコッとしてくれるのが嬉しかった」「身近に食料支援を必要としている人がいることがわかった」と話していました。

池田さんは調理師をめざして勉強している真っただ中。「子どもたちにおいしいと思ってもらえるような料理を作れる調理師になりたい」と夢を語ってくれました。

④左から池田さん、塚本さん、柴戸さん。高校の友人同士だそう
⑤宅建協会久留米支部から寄贈されたお菓子。ひと足早いクリスマスプレゼントになった

自分にできる支援の形

会場の一角に「バターナッツかぼちゃ」という特徴的な形のかぼちゃを見つけました。持ってきたのは宝城団地に住む西嶋さん。もともと農家ではありませんが、知人から休耕田を借りて季節ごとにさまざまな野菜を育て、フードパントリーに寄付しています。

西嶋「自分の子どもが就職するときに『弱い立場の人のために働きたい』と就職先を選ぶのを見て影響を受けたんです。私自身に何ができるか考えていたときにフードパントリーのことを知り、野菜を作って届けることにしました」

西嶋さんのバターナッツかぼちゃ。見慣れない形に参加者も興味津々で、調理方法などを相談し合っていた

西嶋さんの他にも、市内外のさまざまな企業・団体・個人が活動を支援しています。

令和6年に開店したコストコ小郡倉庫店は、賞味期限が近くなったパンなどの加工品を毎週提供。フードパントリーで配るだけでなく、連携する福祉施設などでも活用されています。阿比留倉庫店長は「大容量の食料品を販売しているので、食品ロスの削減は常に経営課題となっている。おいしく食べられるうちに寄付することで、地域の皆さんの生活支援に少しでも役立ててもらえたらうれしい」と話します。

イオン九州もSDGsの取り組みの一環で、家庭で食べきれない食料品を集めるフードドライブを行い協力しています。イオン小郡店の向井店長は「食品ロス削減や支援に市民の皆さんと一緒に取り組む、地域の拠点のような役割を果たせれば」と話します。

その他、賛助会員登録や活動資金の寄付も、あーすちゃれんじゃーの活動を支えています。子どもや子育て世帯を切れ目なく支援するために、社会の理解と持続可能な仕組みづくりが課題です。

私たちにできること――それは特別なことではありません。子育て世帯の現状を知ること。周りにいる子どもや子育て中の人に手を差し伸べること。小さな積み重ねが、地域全体で子どもや子育て世帯を支えることにつながります。

全ての子どもや若者が幸せに暮らせる「こどもまんなか社会」の実現へ、挑戦は続きます。

支援の方法はいろいろ

問 こども家庭支援課
こども家庭係☎73-9147

食料品を寄付する

家庭で食べきれない食料品の寄付を受け付けます。

日時
2月14日(土)・15日(日)
10時～15時

会場
イオン小郡店おりひめ広場

受付できる食料品
- 未使用・未開封で賞味期限が1か月以上あるもの
- 常温で保存できるもの

※上記の食料品でも受付できないものがあります(生鮮食品、みりんや料理酒以外のアルコール、食品表示・栄養成分表示がないもの)

主催 あーすちゃれんじゃーイオン小郡店、小郡市

子ども・子育て支援の団体の活動に参加する

市内ではさまざまな団体等が子どもや子育て世帯のために活動しています。

市はこのような団体等を「こどもまんなかサポーター」として登録し、ネットワークづくりを進めています。

活動に興味がある人はお問い合わせください。

あーすちゃれんじゃーの
フードパントリー

ひとり親家庭などに食料品や日用品を無料で配布します。

対象
市内・近郊に住む子育て世帯

配布日時
2月21日(土)、3月14日(土)
16時～18時

会場 申込者に案内します

事前登録が必要です

必要な支援などを把握するため、面談で家庭の状況などを聞き取った上で登録となります。

あーすちゃれんじゃーの公式LINEを友だち追加して申し込んでください。